

5

大東亞建設民族人口資料二一
昭和十七年三月二十五日

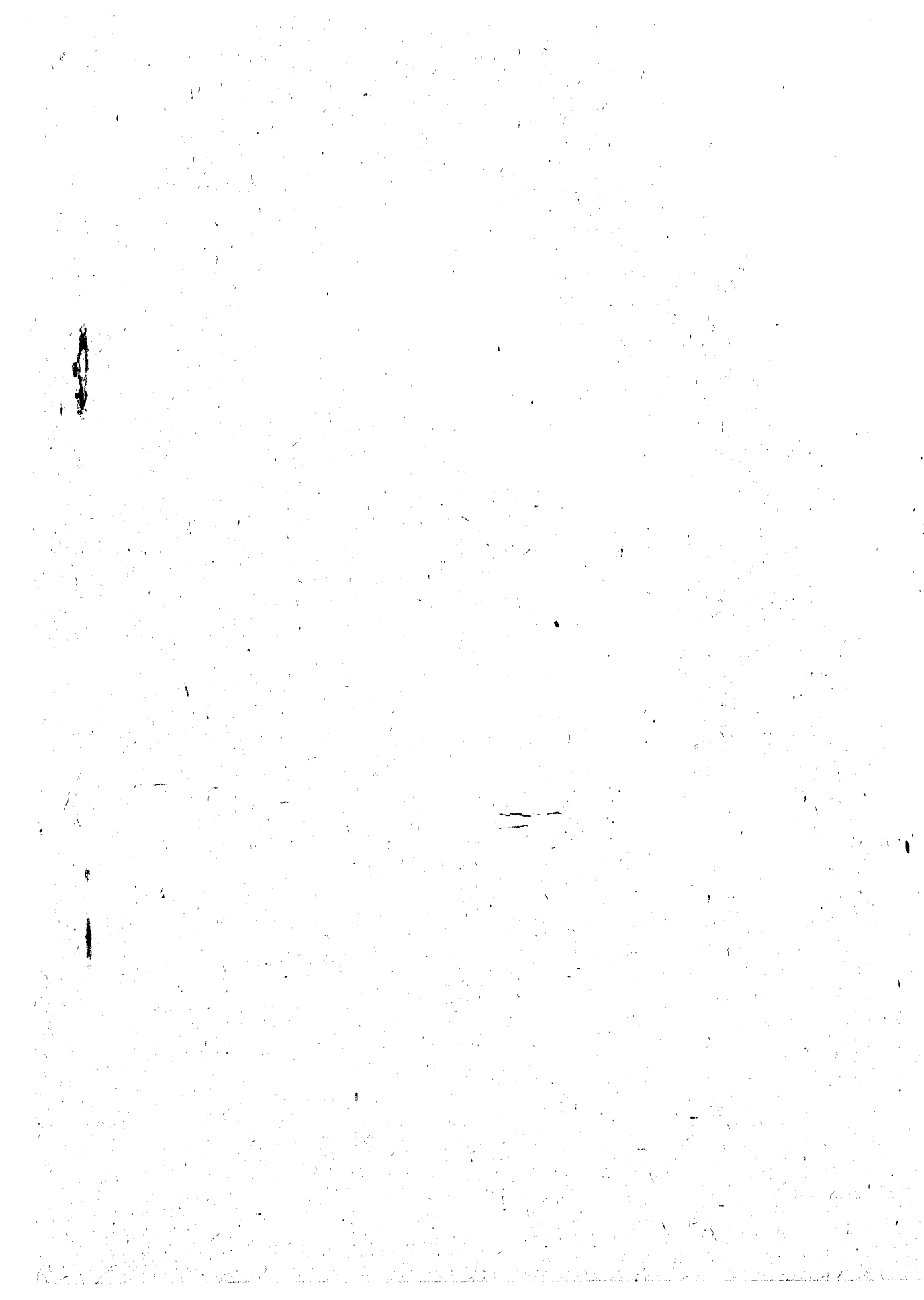
マレー種族の資質及特性に關する資料

厚生省人口問題研究所

国立社会保障・人口問題研究所



1 7 9 6 9 5



内容目次

凡例

前篇總說

第一節 居住地域及び人口

第二節 人種系統

第三節 體質徵表

第四節 心的特性

第五節 生産形態

第六節 生活様式

第七節 社會制度

第八節 宗教習俗

後篇各説

第一節 マレー半島

一) オラン、マラーエ族

第一節 スミトラ島

(一) アチン族

(三) バツタ族

(四) ミナンカバウ族

第三節 ジマバ及マヅラ島

(五) スンダ族

(六) ジマバ族

(七) テンゲール族

(八) マヅラ族

第四節 バリ及ロンボック島

(九) バリ族

(十) ササク族

第五節 ボルネオ島

(十一) ダマク族

三四

三四

三四

三五

三七

三七

三七

三八

三八

三九

三九

三九

三九

三九

第六節 セレベス島

(一) ブギ族

(二) マカツサル族

(三) トラジマ族

(四) ミナハサ族

第七節 比律賓群島

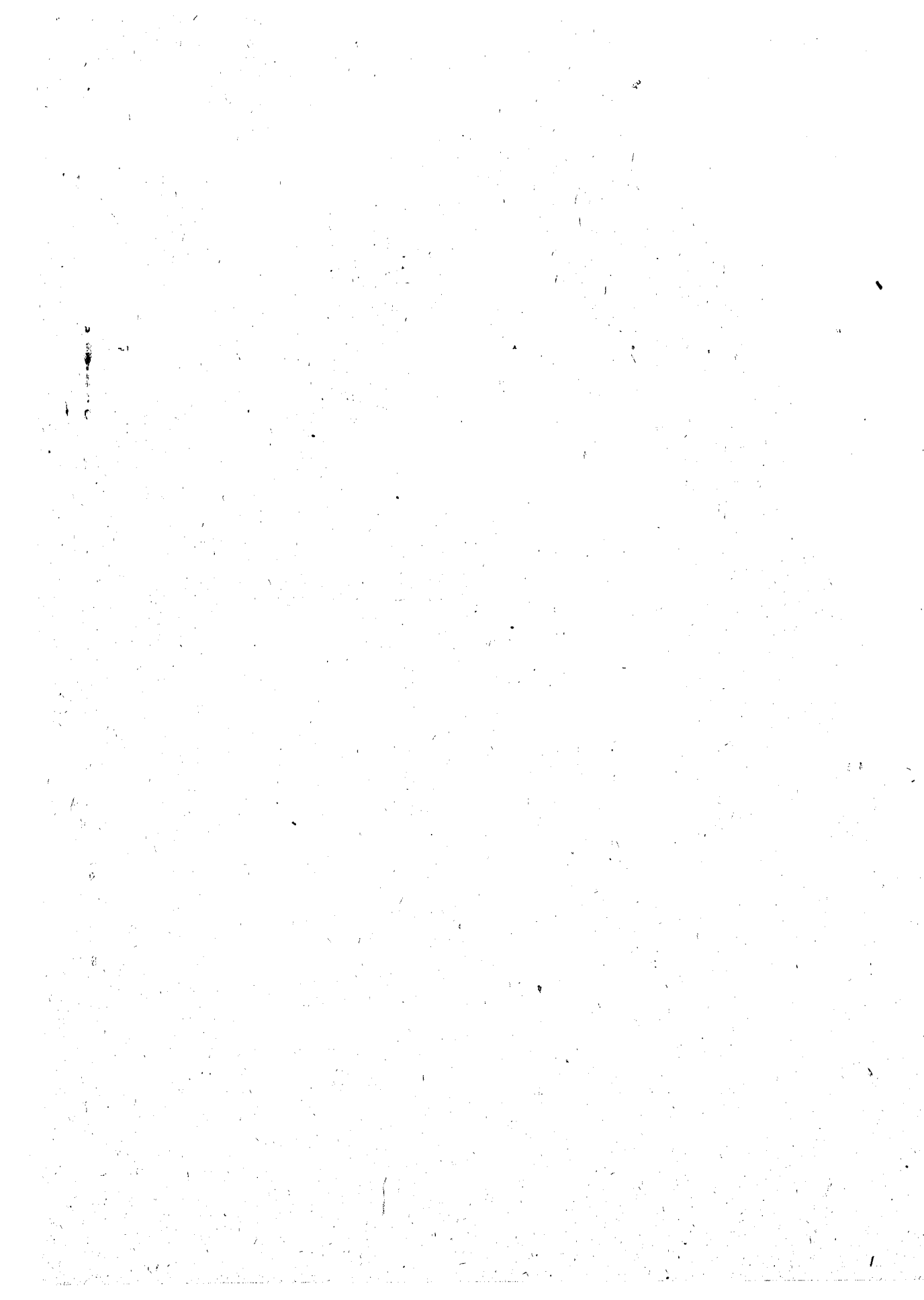
(一) イゴロト族

(二) タガログ族

(三) モロ族

第八節 東辺の諸島

(一) アルフィール族



凡例

前篇（總説）は主としてラッツエルの『民族誌』中マレー種族の部（

Ratzel, Völkerelemente Band II S. 563-588）を基礎とし、旧著のため

同書の猶ほ盡とざる所を其他の文献により補足せるものなり

後篇（各説）は前篇所説の代表的なるマレー種族の夫々につき其の特性を摘要再録せるものなるも今後の補正を要する點極めて多かるべし。猶ほ本輯は別輯「東亜共榮圈内主要民族畧説（其の一）」を参照する所多し



前

篇

總

說



第一節 居住地域及び人口

(一)

居住地域——マレー種族とはマレー半島及びマレー群島（ボルネオ、セレベス、スマトラ、ジヤバ、その他小スンダ列島、モルツカ諸島、比律賓群島等）の現在の住民をいひ、台湾の高砂族も亦その一部をなす。この故に右マレー種族の居住地域を又「マレーシヤ」ともいふ。普通「インドネシヤ」と稱するものなり。

マレーシヤにはマレー種族に非ざる若干の先住民の残存者あり。その主なるものを擧ぐれば次の如し

サカ、イ族	マレー半島	ヴエダ系
セマング族	ク	ネグリト系
アンダマン族	アンダマン島	ク
バタク族	スマトラ島	ヴエダ系
トアラ族	セレベス島	ク
アエタ族	比律賓群島	ネグリト系

(二)

主要種族の名稱と概算人口 — マレー種族中特に主要なるものの名稱
居住地域及び概算人口を示せば次の如し（別輯「畧説」に據る）

バマ ラマ 島	ト マ ス 島	レ マ 半 島	種 族 名	主なる居住地域	概算人口
ス ン ダ 族	ア チ ン 族	オ ラ ン マ ラ ー ユ 族	ジ マ バ 族	ス マ ト ラ の 北 部 海 岸	マ レ ー 半 島 南 端 、 ス マ ト ラ 、 ジ マ バ 、 ボ ル ネ オ の 沿 岸
マ ジ ラ 族	バ ツ タ 族		ジ マ バ の 中 部 及 東 部	ス マ ト ラ の 中 部 山 地	内 半 島 内 に
不 詳	ミ ナ ン カ バ ウ 族		二 八 〇 〇 〇 〇 〇	ス マ ト ラ の 南 部	一 九 七 〇 〇 〇 〇
四 〇 〇 〇 〇 〇	九 〇 〇 〇 〇 〇	三 三 〇 〇 〇 〇			八 三 〇 〇 〇 〇

セ レ ベ ス 島	ボ ル ネ オ 島	バ リ 及 ロンボツク 島
ブ マ ト ミ カ ラ ハ サ ツ ジ サ 族 族 族 族	(クレマンタン族 ムールート族 ケナンマ族 プナソ族 カマソ族 イバン族 等)	ダ マ ク 族 ボ ル ネ オ 島 サ サ ク 族 バ リ 族
セ セ セ レ レ レ ベ ベ ベ ス ス ス の の の 北 中 西 東 南 部 部 部 端		ロ ン ボ ツ ク 及 ス ン バ ワ 島 族 バ リ 及 ロ ン ボ ツ ク 島
一 五 〇 〇 〇 〇 〇 六 四 〇 〇 〇 〇 五 六 〇 〇 〇 〇 二 八 〇 〇 〇 〇		一 〇 〇 〇 〇 〇 六 五 〇 〇 〇 〇

台湾	比 律 賓 群 島							米田の 北島	
高砂族	モロ族	カガヤン族	パンガシナン族	パンパンガ族	イロカノ族	グイサマ族	タガログ族	イゴロト族	アルフル族
台湾山地	ン島 ミンダナオ島、スル群島及パラフ	ルソン島の北部	ルソン島中部	ルソン島	ルソン島の北西部	グイサマ諸島	ルソン島の中部諸州	ルソン島の北部山地	チモール、セラム等々
一五八〇〇〇	五二〇〇〇〇	一五〇〇〇〇	四二〇〇〇〇	三四〇〇〇〇	一〇〇〇〇〇	四九〇〇〇〇	三二〇〇〇〇	四〇〇〇〇〇	

第二節 人種系統

マレー種族の人種的系統につき若干の諸説を掲ぐれば次の如し

- (一) デュモン・ドウルグイス及びメーレンハウト (*Quinquet de Maullees*, *Maesenhaert*) はポリネシヤ方言がマレーシヤの方言に較べて一層根源的なりとのフンボルトの比較言語学的結論に依據してマレー種族はポリネシヤ種族より出でたるものなりとす。

- (二) 之に対シラツツエルはポリネシヤに於ける如く孤立して生活し來れるものに於ては全一の方言は一層純粹なる形に於て保存せらるゝは當然なりとし、ポリネシヤ種及びマレー種の種々の人種学的類以性より兩者は太古に於て全一層より分化せるものと想定す。 (*Rafael, Volkskunde II*, S. 370f.)

- (三) 但し最近の学説はかゝる実証なき假説を設けず。寧ろアジア大陸より數次に亘り諸種族の移動土著せるものとす、例へば「エンサイクロペディア・ブリタニカ」の掲ぐる所を示せば次の如し、

即ちマレー種族の侵入以前の印度支那半島及び西部マレーシア原住民は現在も比律賓に残存するネグリトにして、又東部マレーシア及び西部ポリネシアの原住民はメラネシア人（パプア人）なりしが、先史時代に印度支那半島にコーカサス系人種が現はれ、続いて黄色のモンゴル系人種の出現あり。この二系種よりネグリト及びパプアを除くマレーシア及びポリネシアの全種族は発生せりとなす。

特にマレーシアに就いて之を見れば、最初にコーカサス系人種の移動通過あり、次にコーカサス系の強きモンゴル、コーカサス系人種が移植し来る、之「インドネシアン」或は「原マレー族」と称せらるるものにして、ボルネオのダヤク族、スマトラのバツタ族等をその最も代表的なる現存者となす。更に後に有史時代に入りてモンゴル系及びコーカサス系兩要素の融合せる所謂「真正マレー族」（ジャバ族、バリ族等）の移植し来れるものとなす（"Malay Anthropology" in *Encyclopaedia*

Batavia）

(四)

小山栄三著「人種学概論」(二四二頁以降)はマレー群島地方の人種的構成を古層位と新層位とに分ち、古層位をヴエダ・ネグリイト層位とし、新層位をマレー層位となす。

古層位よりの現残存種族中ヴエダ系のものとしては中央マラッカのセノイ族、セレベス島内部のトアラ族、スマトラのクゲ族、バタック族等あり。

又ネグリト系のものには中央マラッカのセマング族、アンダマンのアンダマン族、その他東比律賓に羊状毛種のネグリトあり。かゝる残存種族に見るヴエダ、ネグリト層位を蔽ひてマレー層位が新層位として現在全地域に稠密なる住民層を形成すとなす。

但しマレー層位にも数次の波動あり、最古のもの(紀元前約三千年と推定)はプロト、マレー(原マレー)と称せらるるものにして、スマトラのバツタ族、ボルネオのダマク族、セレベスのトラゲマ族、ブギ族、ジマバのテンゲール族、比律賓のイゴロト族、セラム、ブール、ハルマ

ヘラ、チモールの諸島に住むアルフル族等之に屬す。

オニの波動は、ドイテロ、マレー（オニマレー）と称せらるるものにして、蒙古人種化せる徴表を持ちジマバに最も稠密に居住するものなり。スマトラのメナンカバウ族、ジマバのジマバ族等皆之に屬すとなす。

第三節 體質徴表

マレー種族の身体的特徴はポリネシア種族と極めて類似し、人類学的にはマレー、ポリネシア種として一括することを得。たゞポリネシア種にはネグリト種との混血顯著なるも、東辺のマレー種族にもネグリト種との多少の混血の事実を認む、但しマレー種族に共通の身体的特徴は極めて顯著にして、ボルデイア（*Bordier*）の如きはマレーシアに於ける人種混交の結末を評して恰も意識的、政策的なる人種育成の成果にも比肩し得るものとなす（*Ratzel a. a. O. S. 371*）。

マレー種族に總括的なる體質徴表を列擧すれば概ね次の如し。

(イ) 身長——瘠身にしく中脊 *Schlanke u. mittelig* なり、若干の計

測値を掲ぐれば次の如し、

グアイスバッハ (*Weisbach*) がジマバ人、マツラ人、ブギ族、ダマク族
の若干に就いて計測せる平均値は一、五五〇米——一、七〇〇米なり

又ジマバ人 (被計測者三人) は——一、六五七米

タガログ族 (被計測者五人) は——一、五六三米

イゴロト族 (被計測者百六人) は——一、五五六米 (測定者ハンスマイヤー)

之らの諸数値はワレリス及びフロウワー (*Wallace; Flowers*) がマレ

種族の平均値として示す一、五五米乃至一、六米なる数値と概ね一致す。

(*Ratzel a. a. O. S. 370*)

(ロ) 均衡——恣態の均整適度の発達はマレト種族の顯著なる特徴なり。

比較的胴長にして蒙古人と相似す。特に若き女の胴体の如き難の打ちと

ころなきものと評する者なり (*Ratzel a. a. O. S. 372*)

(ハ) 皮膚の色——淡褐色 (*hellbraun*) なり。但しマストラのアチン族

バツタ族はボルネオのダマク族、ジマバのジマバ族に比較すると暗褐色
なり。又群島東方の諸族は總じて暗色強し。

反之、ジマバ族は寧ろ小麦色 (*Weisengelb*) といふべくスンダ族よりも
更に明色なり。彼等にして支那服を着用せる場合は之を支那人と識別し
難き場合多し、

但し皮膚の色には旧人的差異極めて多し。ハンス、マイヤー (*Hans*

Meyer) はイゴロト族酋長の妻が陽にやけたる歐洲人の皮膚の如き色を

呈せる事を報告し、且つかゝる旧人的差異は之を社會的理由に歸すべき

ものと論定す。 (*Ratzel a. a. O. S. 369*)

(二) 毛髪 — 黒色の直状毛にして特に粗剛 (*Starrhaarig*) なり。但し

セラム、ジロロ、チモール、アンボイナ等の住民中には縮れ毛の者少か
らず。(即ちネグリト系或はパプア人との混血度の高きを示す。)

(三) 頭蓋 — 概ね短頭型 (*Dachykephal*) に属し且つ高頭型 (*Hypsikephal*)

の傾向あり、頭型指数につき若干の計測結果を示せば

次の如し

ジマバ族 (計測者ブロカ *Brock* 被測者ニ九人) ハ一六

ブギ族 (計測者モンタノ *Montano* 被測者九五) 亜短頭型

比律賓人 (計測者マイルヒョウ *Milchew*) 多数の發短頭蓋骨 (全標の結論

但しイゴロト族、セラム島民等には長頭型顯著なり。又モルツカ諸島、

チモール島、一般に東辺の諸島には中頭型のもの多し (*Ratzel a. a. O.*

370)

(ヘ) 鼻型——広鼻型なり。

(ト) 眼型——所謂「蒙古眼」なり

第四節 心的特性

(一) 兩極的特性——マレー種族の性格は社会的・文化的影響により二重の形相を示す。

その一はシマバ島、バリ島、或はマレー半島等の所謂「開化マレー族」に見る如く其の規則的にして苦難なる労働の結果として形成せられたる文化人種的特性にして、その性質極めて温和にして平和的、物静かにして且つ禮儀正しく、當面の仕事に専心し犯罪を犯すか如きことも極めて稀なるものなり。

他の一は本来の鬭争者的本性にして、アチン族、バツタ族、アルフートル族、ダガログ族等が新来の白人統治者に

對して長く強硬に反抗したる歴史も亦之を證す。又アンボイナ、

マカツサル、マヅラ、一部はジャバ等の住民が兵士として極めて適性を
有すると稱せらるる所以も亦茲に存す。 (*Ratzel a. a. O. S. 511*)

(二) 但し右兩極的特性は必ずしも一方的なる偏在を意味せず。未開の蕃族
として最近まで首狩りをなせる如きものに於てもその性質極めて温順な
るものあり、又その粗策なる農耕労働に極めて勤勉なるものあり。
マヤク族の如きその一例をなす。

反之、文化人種的特性を獲得せるジャバ人の如きに於ては多少一方的
なる極端に去脱せられたるが如き外観なきにしもありず。

(三) 特にジャバ人について——文化人種的特性は特にジャバ人に於て最も
顯著なり。寡言にして大衆的會同の如きに於ても極めて靜肅なり。

西洋人には之を東洋人的靜溢さすといひ、一沫の陰翳を宿すといひ考ふる者

あり
チャーターナー (Charter) はジャバ人の舞踏を評していふ。其は「他
の者の凡てを魅了し去る舞踏の中にあつてその歌はただ死の如き悲哀を
その舞踏はただ最深の幽鬱を表現する驚くべき民族精神となり」と。

(Raffles v. a. O. S. 376)

和蘭政府名下のジヤバ人について最も代表的と考へらるゝ西政人的觀察
の一例を掲ぐれば次の如し。論者ハベル郷は英國人にして植民政策問題
に一家をなす一大家なり。曰く「ジヤバ人は温和であり穩健であり且
つ勤勞的である。彼等が勤勉なのは單に食ふ爲の必要に迫られてゐるか
らでもあるが、併し又本来の性質にも依ると考へられる。

昔の時代からジヤバ農民の生活は勞苦勞役の連續であつた。昔は
彼等は自分自身の爲によりも寧ろ彼等の酋長の不當な榨取を充足する爲
に働いた。勿論この酋長は之を更に和蘭人に吐き出さねばならなかつた
ものである。近頃は酋長の不法な要求は實際上なくなつたが、然し不断

の労働の習慣だけは牢きとして残つてゐるのである。

ジャバ人は人間として野心的でなく、簡単に満足するたちで、その嗜好も單純である。暢氣で成行次第の賭博者として金錢に執着はするが併し金錢にさしたる價値を認めるわけではない。その欲望は極めて僅小で、儼かの米と一片の乾葱と多少の野菜があればジャバ人とその家族とを満足させるに充分である。税の支拂と菓子購入に必要な僅かの金錢は近所の製糖工場乃至煙草工場で数時間も働けばた易く手に入れらることかてきる。

この様も溫和な諸條件にも拘らずジャバを訪れる者は誰でも住民大衆の悲惨で精氣のない様子に心を打たれるのが普通である。彼等は殆んど笑顔を見せず、彼等の笑ひ声といふものは殆んど耳にし得ない。顔は無神経な諦めの表情を示して居り、怒氣を食んだ声を聞くことなどは殆んどない。ジャバ人は歐洲人に対して礼を欠くとはいへないが、併したかりとして丁重で尊敬の念を抱いてゐるとも決していへぬ。

彼等は単に熟し掛けられでもされず、水は外來者に対して一片の注意を
し、脚はぬし、且つ話し掛けられでも必ずしも當に返事をしてくれら
ぬわけでは無い。とはいへ、彼等が極めて多くの善良な性質を所有して
ゐるといふことは疑ひないことである」と。(H. C. Cole, 1934, p. 10)

Foreign Colonial Administration in the Far East (p. 8-10)

第五節 生産形態

(一) 農耕 — 民族的生業と称すべきものは農耕活動あり。

而かも歐洲人の経営する近代農場に於ける労働を除き、凡そ自給自足的
生産を主とす。ジャバ島の農民に於ても亦全し。

其の中心をなすは米作あり。

バタ族とダマク族との米作につきシュライバー (Schreiber) の報告する所を掲ぐ
れば次の如し。

「両族とも主として農耕によつて生活し、且つ米作を第一としてゐる。併しバツタ族に於ては米作は巧みに階段式に構築せられ且つ屢々長い人工水道によつて灌漑せられた水田に於て行はるるに對し、タヤク族は猶ほかかる方法を採用せず、たゞ林野を焼いた跡に稲を植ふる。そして数年毎に田を換へてゆく」と (Rappelt a. a. O. S. 417)

但し文化段階の相違如何を問はずその農耕労働は極めて勤勞的なり。ボック (Bock) が南東ホルネオのタヤク族の村について報告する所を掲ぐれば次の如し。

「毎朝七時頃には男も女も半ば成人せる子供らも一家揃つて家を出かけ、ここでは米の外に家の周囲の畑で王蜀黍、甘蔗、ほふ等を作る。がそれらは自家用に必要な分量だけしか作らぬので米の不作の時には必常な困難に当面する。日没と共に、男は一束の薪を、女はいくらかの栗実を持つて其の苦しい労働から歸つてくる。が女は歸定後も米を搗ぐねはふらぬし、又竹壺に水を充たさねはふらぬ。」

老人と大工と船大工だけが野良に出ずに家で仕事をしておる」と。

(Ratjel a. a. D. S. 418)

カクヤ族に於てさへもその米作は相當の勤勞作業にして、苗床に蒔種して後移植する法をとり、移植後も雜草取り、野豚、野鼠の驅除等極めて甚しき勞働を行ふ。特にバツタ族に見る如き人工水利による階段式水田耕作は農耕種族たるマレー種族農耕勞働の最高度を示すものにして、鉄製の犁を用ひ水牛を使役し、また施肥も行ふ。かゝる高度技術は印度起源のものにして、ジャバ、バリ、ロンボークの諸島に見るものは和蘭治下の治世の下に更に之を最高度の發達を遂げたるものあり。

但し群島の東方に移るに隨ひ米作よりも、サゴ椰子の裁取を主とするに至る。サゴ椰子林は村の共有にしてその裁取には一定の規約あり。ヨエスト (yeat) がセラム島について報告する所に依れば一男子が一ヶ月に打ち落すサゴの量はその半數を以て一ヶ年分の食用に足り、他の半數を以て装身具、ナイフ等の必要品と交易するに足る程にて、東セラム島

の加工産物は優に近隣の諸島を養ふに足るものありといふ。

(Ratgel, a. a. O. S. 420.)

(二) 牧畜——さして盛人ならず。牛を飼ふものは特に稀なり。之を飼育するも食用乃至搾乳を目的とせず。即ちマレー種族は生來の農耕民族にして游牧民族に非るなり。一般的なる家畜は水牛、豚、犬、鶏等なり。

(三) 狩獵——到る所に生來の狩獵種族あり。但しジャバ島、ルソン島を除く。

(四) 漁撈——海岸地方に住むマレー人は生來の漁撈種族なり。網、針、籠、矢、或は毒物を以て捕獲し、乾煎、燻炙又は塩づけとして之を交易す。

(五) 其の他——家内工藝的紡織、手工業的なる冶金、造船等に多少見るべきものあり。

(六) 近代産業労働——マレー種族は資本主義的近代産業の労働者としては農園労働の場合を除き極めて不適性あり。

バンクカ、ペリトン島の豊饒なる鉱物資源も支那人をくしては採掘する
こと不可能なる状態にあり。

第六節 生活様式（衣食住）

衣についで——種族及び階級の相違により或は裸体と逕庭なき程度のも
のより苗長りの着用する東洋的なる過大裝飾にまで及ぶ。

衣料の最も原始的なるはバルネオ奥地のカマク族狩獵者の用に獸皮。
更に一步を進めたるものは樹皮をたぎて紡げる織物なり。

但し群島西部の開化部族の着用する布地のサロン（西洋人の短スカート風
の下衣）その他は凡て商品として海外より輸入せらる。近時下衣としては
太き半ズボンを用ふるもの多し。

總じて衣服は熱帶的影響の下に特殊の文化的發達の跡を示さず。但し上
侯の家族の如きが着用するものは屢々極めて高價なる金の裝飾を施せる東
洋的過大裝飾の衣裳なり。ワレース(Wallace)はテルナテ島のサルタンにつ
いて其の衣裳は数千金の價値ありと推定す。

(二) 食についで——主食物は米（又はサゴ椰子）、米についで玉蜀黍、甘
蔗。副食物としては魚類（鮮魚、乾魚、燻製魚、塩づけ）、野菜。

嗜好物の双壁は檳榔子と煙草。(煙草栽培は歐州人の農園的栽培以前より行はれ、主要なる交易品をなす。) 亜片喫煙の悪習は一部シマバ島に見らる支那人の輸入せるものなり。飲酒は他種族に比し節度あり。(椰子酒を主とし、又米、甘蔗よりも軽き酒を造る。)

(三)住にうりて——抗上家屋たるを最大の特徴とす。(抗上家屋はもと外敵と野獸とに對する防衛を主目的とす。故に治安の發展と共に抗の高さは次第に減少する傾向あり。ホルネオのミラノに於ける如き嘗て地上約十二米に及ぶものありしも今は新築せらるゝことなし。シマバ、バリ等に於ては極めて低く殆んど地上家屋の如し。) 角形建築、特に正方形の家屋と急傾斜の屋根も特徴なり。木造を主とす。竹を用ふることも多し。壁には棕梠の葉を用ふ。

カマク族は八十米突にも及ぶ長屋(或は一村一家とも稱すべきもの)を仕切りて、三十乃至四十家族が夫々別戸に住むを普通とす(Papua, p. 5413) 但しシマバ等に於ては一家族一戸を構ふるを一般とす。總じては猶一戸に數

家族同居すゝが普通なり。

第七節 社會制度

(一) 婚姻制度——總じて猶ほ賣買婚の段階にあり。故に又雜婚も極めて容易なり。而して最も一般的なる離婚理由は不妊なり。

賣買婚の結果として種々異様なる習俗あり。貧しくして恋人を妻として買ひ取り難き者に対しては其の友人らが女を盗み出し、女の兩親は怒ひなく安價にて之を手放すといふ如き其の一例なり。

特に賣買婚に伴ふ一般的慣行として(一)女の立場を全く隷屬化せしむることと(二)趣旨を以て特に支拂額の一部を未納のままにして置くことあり、(三)また女が學費を支辨し男は贈り物を爲すことによりて相互に對等となることあり。(四)全然未拂の場合には男は女の家に隷屬化するにと、なる。メナンカバウ族には右三形式の凡てを認むることを得。バツタ族に於ても(一)と(三)との慣行あり。

また族外婚にして、且つ母系相續制をとるもの多し。但しシマバ族、バツタ族、アチン族、セラム及ブールーのアルフル族、チモール島民の如きは既に男系相續の段階にあり。

一夫多妻制を妨げざるを普通とし、回教信仰は之を更に支持強化せるもの、如しの但しセラムのアルフル族、ルソンのイゴロト、イロンゴット族等の如く一夫一婦制をとる例外あり。

なほ一夫多妻制度は族外婚の制度が男系相續制と結合せる場合に義兄妹婚の風習として現はる、場合あり。即ちハツセルト(Hasselt)ガレデマシに就いて報告する所によれば、一酋長の七人の妻の内五人は彼の兄弟の死の結果として引き取りたる義姉妹なりしといふ。(Ratzel a. a. O. 5433)

(二) 社會機構 — 社會生活は家族を單位とし血統的同族を以てその最も重要な共同体的單位を爲す。且つこの血統的共同体は同時に同一地域に居住して村落的共同体を爲し、其の酋長は其の地域の行政的實権者をなす

その政治的乃至社會的機構は血統的相續を伴ふ貴族主義的寡頭支配なり。
狩獵種族の場合等を除き奴隷階級の存在することを普通とす。

奴隷となるものは戦争の結果としての捕虜の外、犯罪を犯してその賠償金を支拂ひ得ざるもの、及び一般の債務者なり。右債務者となる理由の大部分はマレー種族の先天的性向の一ともいふべき賭博にありといふ。

第八節 宗教習俗

全マレー種族の大部分は回教を信じ、メツカ參詣を生涯最大の念願となす。但し回教信仰と並ひて古来の祖先崇拜に淵源する精靈崇拜あり之に伴ふ迷信も亦極めて多し。

シユライバー (Selakster) がダマフ族について報告する所によればその全生活は宗教的行動、即ち迷信的な物の見方前兆と夢判断、一定の贖罪行為を以て貫かれたものもそれらの行動は概ねその内容の反道德的なるものなりといふ (Radyak a. a. O. S. 377 f.) 4 モール地方の住民について彼等は祈禱と供物

なしには何物をも殺さずなど、云はる、所以亦右と同じ。

後

篇

各

說



第一節 マレー半島

(1) オラン、マラトエ族

(1) 居住地域及人口——マレー半島南端、その他スマトラ島の中部及東海岸シマバ島の北岸、ボルネオ島の西及南海岸等。總數約二百二十三万、マレー半島に居住する約百九十七万。

(2) 人種系統——スマトラ島より渡航植民せる開化マレー族、但し爾後の混血顯著なり。

(3) 體質徵表——皮膚シマバ族に比し暗色強し。

(4) 心的特性——西方開化種族の一として概ねシマバ族に同じ。

(5) 生産形態——外國資本による資本主義的農園經營と獨立して自給自足的
水田稻作を行ふこと亦シマバ族に同じ。他に漢業者多し。

一その他概ねシマバ族農民と大同小異

(7) 宗教——回教

第二節 人々トラ島

(一) アタラシ族

- (1) 居住地域及人口 — スマトラ島北部海岸地方、約八十三万、
 - (2) 人種系統 — 原マレー族
 - (3) 体質徴表 — 皮膚暗褐色、身体頑強
 - (4) 心的特性 — 慍悍（嘗て和蘭政府をしてその統治に悩ましめたる種族の一）
 - (5) 生産形態 — 農業（米作）、漁業、
 - (6) 生活様式 — 極めて簡單なる木造家屋
 - (7) 社會制度 — 一夫一婦制、血族結婚を禁ず、男系相續。階級的分化強く、奴隸階級あり。
 - (8) 宗教 — 回教
- (三) バッタ族
- (1) 居住地域及人口 — スマトラ島中部山地、約百二十万、

(2) 人種系統 — 原マレー族

(3) 體質徴表 — 皮膚暗褐色

(4) 心的特性 — 原マレー族系中最も進化せるものに屬す。嘗て和蘭政府を
悩ましたること上揚アチン族に同じ。

(5) 生産形態 — 人工水利による階級式灌溉の水田米作をなす、

自給自足的經營。(外に玳瑁、煙草等の栽培、機織、土器製作、金屬細
工等、之を以て日用品との交易に充つ)

(6) 生活様式 — ガマク族、アチン族等に比し高し、巧緻頑丈なる木造家屋
を造る(子供が成人するまで耐久性あるを目標として建築す)

(7) 社會制度 — 男系相續(三十戸乃至四十戸の男系親族を以て村落を構成
す)族外婚、

(8) 宗教 — 回教(近年キリスト教への改宗者もあり)

(四) ミナンカバウ族

- (1) 居住地域及人口 — スマトラ島南部、約二百万
- (2) 人種系統 — 近代マレー族の祖と稱せらる。
〔概ねバツタ族と類似するも特に注目すべき事項は〕
- (3) 社會制度 — 純粹なる母系社會を爲す点にあり、
- (4) 宗教 — 回教

第三節 ジャバ及マヅラ島

(五) スンダ族

(1) 居住地域及人口——ジャバ島西部、約九〇〇万

(2) 人種系統——ジャバ族と同じく所謂真正マレー族に属す。

(3) 体質徴表——ジャバ族に比較して皮膚稍々暗褐色

〔其他概ねジャバ族に同じ〕

(六) ジャバ族

(1) 居住地域及人口——ジャバ島の中部及北部、人口約二千八百万

(2) 人種系統

所謂「真正マレー族」の代表種族なるも印度、印度支那、支那人等と

の混血の跡顯著なり。

原マレー族と之等諸系種との雜種と称するを得。

(3) 体質徴表——淡褐色或は黄褐色皮膚層、

總じて蒙古族の特徵顯著なり。

(4) 心的特性 — 極めて温順、柔和、非闘争的、

(5) 生産形態 — 水田米作中心の農業、自給自足の経営にして、歐洲人の資本主義的農業経営と並存す。

(6) 生活様式 — マレシ種族中最も肉化の度高し。一家族一戸を構ふるを普通とす。

(7) 社会制度 — 早婚（男十六才、女早きは十二才位）強固なる父家長的家族制度あり、一夫多妻を拒げず、農民社会は強固なる村落共同体をなし、灌漑田を共有するも、事実上世襲的私有化の状態にあり。

(8) 宗教 — 回教

(七) テンゲール族

(1) 居住地域及人口 — マツラ島、約四百万

(2) 人種系統 — 類マレト族

(3) 体身徴表 — 低身、中頭型、黒髪

(4) 心的特性 — 一懐暁、ダマク族に似て

(8) 宗教 — 特靈崇拜

(1) 居住地域及人口 — マツラ島、約四百万

〔概ねジャバ族に似たり〕

第四節 バリ島及ガロンボック島

(九) バリ族

(1) 居住地域及人口 — バリ島及ロンボック島

〔概ねジャバ族と同じ。但し〕

(8) 宗教 — 波羅門教

(十) ササク族

(1) 居住地域及人口 — コンボック島及スンバワ島、約六十五万

(8) 宗教 — 回教

第五節 ボルネオ島

(土) ダマク族

(1) 居住地域及人口 — ボルネオ島、約八十五万

(2) 人種系統 — 原マレー族

(3) 体質徴表 — バッタ族と似たり

(4) 心的特性 — 崇拜(最近まで首狩りを行ふ)

(1) 生産形態 — 焼畑農業を主とする。米作農業（即ち上掲バツ夕族に比し、遙かに原始的なり。）

(6) 生活様式 — バツ夕族に比し遙かに低し。長家式の大家屋に住む。

(7) 社会制度 — 大家族制、土地は部族、氏族等に帰属す。酋長、平民、奴隷の社会階級をなす。

(8) 宗教 — 精霊崇拜（邪教的迷信多し）

第六節 セレベス島

(主) グダ族

(1) 居住地域及人口 — セレベス島南部、その他ボルネオの海岸地方、マレー半島、スンダ列島等にも分布、約百五十万

(2) 人種系統 — 原マレー族

(3) 体質徴表 — 暗褐色皮膚、広顔型、平鼻

(4) 心的特性 — 活動的（特に商才あり）

(5) 生産形態 — 農業

(8) 宗教 — 回教、ヒンヅー教

(註) マカツサル族

(1) 居住地域及人口 — セレベス島西南部半島の西側、約六十四万

(2) 人種系統 — 原マレー族

— 概ね前掲ブマ族と似たる也

(3) 宗教 — 回教 (但し精霊崇拜も盛なり)

(註) トラジマ族

(1) 居住地域及人口 — セレベス島中部、約五十六万

(2) 人種系統 — 原マレー族

(4) 心的特性 — 怠惰 (未開の夷族にして嘗て首狩をなせる種族なり)

(5) 生産形態 — 農業 (女子が主として働く)、土地私有なし

(6) 生活様式 — 山間に住む者に於ては岩の如き家屋に住み数家族同居

(7) 社会制度 — 女子の社会的地位強く結婚に際し女が夫を送る権利を有す

(4) 宗教 — 精靈崇拜

(五) ミナハサ族

- (1) 居住地域及人口 — セレベス島の北東端ミナハサ州、約二十八万
- (2) 体質徴表 — 皮膚比較的白く、鼻高く、容観美なり。
- (3) 心的特性 — 文化進み、頭腦優秀。下級官吏、学校教師、軍人等に採用する者多し。
- (4) 生活様式 — 極めて進歩せる生活様式をなす。
- (5) 宗教 — キリスト教

第七節 比律賓諸島

(六) イゴロト族

- (1) 居住地域及人口 — ルソン島の北部山地、約四十万以上
- (2) 人種系統 — 最も古く比律賓に侵入せる原マレー族

(4) 心的特性 — 闘争着的本性（嘗て首狩りをする種族）

(5) 生産形態 — 原始的なる焼畑農業（米、甘蔗、玉蜀黍、粟、豆類、夕口芋等）

(6) 生活様式 — 殆んど半裸体的生活をなす。

(8) 宗教 — 民族宗教

(5) タガロク族

(1) 居住地域及人口 — ルソン島の中部諸州、約三百二十万

(2) 人種系統 — 前掲イゴロト族の後、渡来し之を奥地へ追放せる原マレー族、所謂「比律賓人」の根幹をなす種族多し、支那人、スペイン人との混血甚し。

(4) 心的特性 — 總じて混血児は非混血人よりも社会的能力高く、又之に入ルは支那人との混血児が特に堪能にしてスペイン人との混血児より優る。

優劣なりとす。

(Katzel in O.S. 395)

(8) 宗教 — キリスト教

(1) 居住地及人口 — ミンダナオ島、スール、群島、パラワン島、等、
約五十二万

(2) 人種系統 — 人種的にはタガログ族等と大差なし。但しアラブ系要素の
混入を認む。

(4) 心的特性 — 慍懣にして滲忍へスペイン及アメリカの統治下に屢々反乱
を繰く。

(5) 生産形態 — 原始的農業、一部漁業

(6) 生活様式 — 水上家屋

(8) 宗教 — 天主教

第八節 東辺の諸島

(先) アルフィル族

(1) 居住地及人口 — セラム、ハルマヘラ、チモール等

- (2) 人種系統 — 原マレ — 族
- (4) 心的特性 — 闘争者の性格
- (5) 生産形態 — 米よりもサゴ椰子を主食とする。
- (6) 生活様式 — 儉し、また異色多し、(例之、午毛 — ル地方の内推形家根等)
- (7) 婚姻及家族制度 — セラム島のアルフル族は一天一掃制、近縁系
- (8) 宗教 — 回教

